

正岡子規漢詩研究
(要約)

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期 人文学専攻
学生番号：D131919
氏名：何 美娜

正岡子規漢詩研究

本論文は正岡子規の漢詩について、主に中国古典文学との比較の観点から論じたものである。第1章の序論では、正岡子規の生涯と業績、漢詩創作の背景を簡単にまとめてから、研究の動機と目的および先行研究に関して分析を行った。次の第2章では、子規漢詩と中国の古典との関連について論じた。第1節では子規漢詩と陶淵明の関係、とりわけ、子規の陶淵明への認識について考察を加えた。子規漢詩の中では陶詩を借用する表現が多く存在している。そうした受容例を分析することによって、子規が隠逸的な陶淵明像を受け入れていたことが分かる。作詩において閑居や隠逸等に触れる際、自然に陶詩の表現を用いていることはその証拠である。また、子規が漢詩作品では自分のことを自ら陶淵明の諡号で呼んでいることから子規の隠逸的な陶淵明への傾倒が窺える。その一方で、子規の目に映る陶淵明はただの隠逸的、消極的な人間ではない。子規は陶淵明の胸中にある志に気づき、陶詩の表現を借用して、わざと隠逸する意味を脱落させ、自らの作品において陶淵明の心を、さらに自分の心を訴えようとした。子規が受け止めた陶淵明像には従来の非人情的、且つ隠逸的な陶淵明像だけではなく、社会進出の意欲を持つ、人情的な陶淵明像も含まれている。子規は隠逸した陶淵明に憧れを持っていたが、挫折により果たせなかった陶淵明の立身出世の気持ちをより理解し、共鳴し、自身の人生の中で、陶淵明自身が完成することなく終わった大志を彼に代わって実現させたかったのではなかろうか。こうした考察から、子規は陶詩から自然描写のヒントを得るだけではなく、陶淵明の人生観からも影響を受けたことが分かった。

第2節では子規漢詩と杜甫の関連について分析した。子規は杜甫の詩語と詩境を借用していて、自分なりのアレンジを加えている。特に、中国での従軍記者の体験によって、杜甫の詩作に対する理解がより一層深まったことが分かった。それは子規自身の漢詩に対する詩眼がさらに開くことに繋がった。また、子規が受けた影響は詩語と詩境だけではなく、杜詩の詩形にまで及んでいた。そして、子規の杜甫への憧れと模倣は漢詩という形式だけにとどまらず、俳句にまで及んでいることも確認した。

第3節では子規漢詩と李白の関わりについて考察した。この考察から李白のような浪漫的な詩風を帯びている詩作が子規漢詩にもあることが明らかになった。子規は写実、写生とともに、李白のように、理想と空想も作品の中に取り入れることを試みた。しかし、子規は結局、想像力で現実経験を比喻する道より、ありのままの現実を叙述し、写実に斬新さを求める道を選んだ。その理由としては、まず明治時代においては、写実を重んじる宋詩風を尊重するという時代背景がある。そのほか、李白の詩風を継承することの難しさも考えられる。さらに、客観的な自然美を愛する性格も子規の写実的な作風を決めた重要な一因である。しかし、子規は李白の詩風を継承しなかったが、李白の詩語と詩境を模倣する試みからもヒントを得て、最終的に自分にもっともふさわしい写実という理論に達したと言えよう。

第4節では受容例を分析することによって、『莊子』が子規漢詩に深い影響を与えたことが分かった。子規は『莊子』にある「蝶夢」をもって、自然描写の詩材として使用し、場合によって、無為という意味を込めて使用していた。「鯤」と「鵬」を借用するときには、莊子が言う自由な境地より、子規は志を持つという意味を意識して自分の詩作に取り入れた。また、「呼馬呼牛」と「繡牛」の場合、子規は莊子のような世間の目を気にせず、自分の生き方を最後まで貫くという意味をそのまま取り入れた。子規は『莊子』の世界に魅了され、言葉と境地を取り入れているが、病弱な体でありながら、自己の立身出世の大志をいつまでも捨てなかった。つまり、莊子の無為や自由天地という精神に対して、その思想に憧れながらも、自らの人生観には取り入れなかったと言えよう。しかし、莊子の言う青雲の志、曲げない生活態度や交友の道に対して、子規は敬服して賛同していた。また、『莊子』の中に出てくる多種多様な動物と植物を通して、大自然への鑑賞の写生眼を養っていたに違いない。

第5節では子規の絶命詩について考察した。明治三十五年一月頃に創作された子規のこの絶命詩は愛読書である『水滸伝』の魯智深に関するくだりから、詩語や詩境まで借用している。しかも、子規は詩作の主人公である魯智深に抱えている煩惱と苦痛を投影させて、自分自身を魯智深と重ね合わせている。想像を絶する病苦と戦う中で作られたこの詩には、死を平然と迎える覚悟があり、

そしてさらに一歩進んで、平静に生きていく悟りも込められている。子規は魯智深という人物の生涯や結末に潜んでいる仏教の「無我」という真意に同意し、宗教嫌いでありながらも、自身も密かに魯智深のように円満な結末を迎えたいと願っていたのであろう。その一生を大自然の美に囲まれ、写実という手法を生み出した子規は最終的に我欲をなくし、穏やかな山水風景と一体化できたと言えよう。

続く第3章では、子規漢詩と中国古典との関連に目を向け、子規漢詩のほかの特徴に重点をおいて、異なる視点から論考を進めた。第1節では子規漢詩における想像上の女性と現実の女性の形象を考察した。子規の漢詩を読むと、女性を劣等視し、蔑視するという理解だけでは、子規の女性に対する意識を理解し尽くせないことが分かった。子規のほかの文学作品と異なり、漢詩を分析すると、子規の女性への深い思いやりという側面が見られる。特に、子規は閨怨詩の女性主人公たちに、少年期に家を離れた寂しい気持ちと自分への励ましを重ねて詠んでいる。また、子規は自身の女郎買いの体験から、情緒に溢れた遊郭の中にいる遊女の姿を詠んでいる。さらに、子規は自分の理想の女性について、また、他の文学形式では恥ずかしくて書けない恋に対するコンプレックスや憧れなども、漢詩の中に綴っている。そして、漢詩の中では、身近にいる母親と妹への愛情も読み取れる。現実にいる母と妹の姿は子規に女性への認識を与えたと十分考えられる。特に、母と妹の姿は子規の恋愛と婚姻の自由、女子教育に対する積極的な態度という先進的な思想形成までに繋がっていると言えよう。

第2節では子規漢詩の平仄と内容について分析した。子規の漢詩が中国近体詩の諸規則に即って作られていることを、押韻や平仄を検証することによって、明らかにした。平仄の検証を通して、子規の漢詩が韻律上では完璧とは言えないまでも、実に様々な技法を用い、多様な韻脚や文型を作品の中に取り入れていることが分かった。訓読と現代語訳についての検証も含めて、子規の豊かな漢字力や優れた詩材を余すところなく読み取ることができた。

第3節では子規漢詩の内容に関わる和習的特色を用語上の側面から論じた。子規は日本の地名や人名、また、日本語の漢字、日本の風習や説話なども漢詩

の中に数多く取り入れている。子規漢詩におけるこのような詩語は徂徠の「和習」に対する定義から見ると、確かに和習に属する。しかし、日本で育った子規が日本特有の風習や地名などを漢詩の作品に取り入れることは当然である。子規はそれらの詩語をもって、日本の生活と習慣などを違和感なしに表現でき、現実性を帯びるような漢詩作品を成り立たせている。こうした手法は日本漢詩の独自性を主張しようとする子規の試みであるとも言えよう。

第4節では子規の題画詩を見てきた。子規は題画詩という特殊な詩歌形式を用いて、中国の古典著作や古代の曲に付けている歌詞まで受容し、また、中国の詩人たちの詩句から用語や詩の境地を学んで作詩していたことは明らかである。しかし、子規は単純に借用せず、自分なりのアレンジも加えていた。また、題画詩の中には子規の思想も潜んでいる。例えば、鼓を落として拾えずに女々しく泣いている雷公が画かれている絵を見て、子規はその並々ならぬ発想に魅了されていた。即ち、一般的な儒教の「貧に対する泰然とした態度を取っていることが高尚である」という教えとは逆の考え方に共感を持っていた。さらに、自画山水に対する漢詩作品から、少年子規の画風が管見できた。日本の南画のルーツで、王維、董源、巨然、米芾、米友仁に代表される南宗画の手法を少年時代から好んで模倣したことが分かった。こうした少年子規の写実的な「師法自然」という作画の理念は後年の子規の写実理論の萌芽であるとも言えよう。

第5節では子規の詠物詩を3つの部分に分類して考察を加えた。子規の多くの詠物詩は単に対象物を精緻に描写するのではなく、そこに作者自身の情を直接的に、あるいは、間接的に表現するものも多い。また、子規は詠物詩の中で写実と同時に想像を膨らませ、関連する歴史的イベントも詠じている。こうした点から見ると、子規は漢詩創作において、写実を重視しながら、想像、擬人、比喩などさまざまな手法を用いたことが分かる。また、子規は詠物詩の中では普段言えない自分の志や悲しみなども対象物に託し、ユーモラスや斬新な発想をもって詠じ、漢詩創作に励んでいた。

第4章では研究のまとめ及び今後の課題について述べた。資料として、『正岡子規漢詩索引』と論文に関連する子規漢詩の注釈を附した。